

こんな時期だからと言うわけではないが、キリスト者俳人の作品を掘り起こしてみるのも無駄なことではないと考えるものである。

日本に於けるキリスト教は、徳川幕府が徹底的に弾圧したが、明治・大正期に信教の自由のもとに布教が盛んに行われた。知識人や文学者の中にキリスト教の門を叩く者が少くなかった。飛旅子の師である楸邨も、父母に連れられて教会に通い、大正七年、十三歳で受洗している。

飛旅子(博)は、大正三年生れであるが、母方の祖父がクリスチャンであった関係で、子供の頃から母と共にキリスト教には親しみを持っていた。

昭和八年旧制一高に入学するが、寄宿寮が本郷にあったので日曜日には家に帰らず、友人と中央会堂というメソジスト教会(プロテスタント)に通っていた。この年のクリスマスに、「受洗は信仰の入門なり」と牧師にすすめられ、断り切れず洗礼を受けた。「有無を言わずだつた」とは自身の弁である。

プロテスタントとは、カトリックに対して抗議(プロテスト)したことによって付けられた名称。伝統をしりぞけ、聖書のみに戻す宗派である。

椎名麟三や太宰治など聖書にテーマを求めた作家は多い。カトリックの遠藤周作、プロテスタントの三浦綾子はつと

に有名である。

飛旅子の科学者としての出発は、やはり一高理科甲類入学からとなる。そして、昭和十二年に東大工学部応用化学科に進学する。

理数系が大の苦手だった飛旅子は、好きな文科に進みたかったが、応用科学の技術者だった父の厳命でやむなく断念する。受験に失敗して苦労したこともあり、弱気からくる挫折感を「竜胆は若き日のわが挫折の色」「老いてなほ忌む予備校の冬の匂ひ」等と詠む。

文学への思い断ちがたく、父に隠れて短歌に手を染める。土屋文明の「アララギ」に入会し、昭和九年から二十五年までは歌人でもあった。昭和十四年の「アララギ」での一首。

かたはらにかがよふ少女取り出し

読み始めたり「人は何により生くるか」 博

昭和十五年、東大を卒業して、古河電工(株)に入社。研究者・技術者として電池製作所に配属される。「電池及蓄電池」などの著書があり、四十七歳の時、東大から工学博士の学位を授与される。

俳句を始めたのは入社直後からである。「アララギ」で作品が活字になる喜びを既に味わっていたが、或るきっかけで加藤楸邨を知り、「寒雷」創刊から投句。その創刊号

の巻頭を取つてのめり込むことになる。「風」にも所属し、昭和四十八年には「陸」を創刊。著作は、句集七冊、「加藤楸邨一人と作品」など。

さて、飛旅子は生涯にどれ位のキリスト教的俳句を作つたのか。活字になつたもので、私が採集できたのは二百六十句。古い時代のもの、未発表のものを加えるなら、何百句にもなると思われる。有りていに言えば、キリスト教が全作品の背景にあるのだが。

ここで気付くのは、信仰句の多さに比して、代表句といわれるものの中にその作品が少いということだ。敬虔であろうとすればするほど、いわゆる名句にはなり難いという宿命を持つているのかも知れない。

泥臭いと評されながら、己の弱さや傷、老や死、信仰の苦悩をこれほど赤裸々に詠み続けた俳人がいただろうか。常に自分を痛めつけていなければ落ち着かなかつた生涯である。本稿の副題を「内なる迫害」とした所以でもある。

結末を言つてしまふなら、死のほんの数年前になつて、ようやく得心して「基督者われ」と詠んでいる。そこへの長い心の軌跡を信仰句を中心にして辿つてみたいと思う。因に、私はキリスト教徒ではないので、誤謬をおそれつつ俄か勉強で書いたことを付記します。

信仰の空白期

信仰の作品が無いという主旨の空白期であつて、信仰の沈潜期と言つた方が当を得ているかも知れない。昭和十五年から昭和三十年迄で、丁度第一句集「花文字」に相当する期間である。皮肉なことに、代表句と言われるものはこの期間に集中している。

後年飛旅子は、(信仰に熱意を欠いた時期があり、教会に通うこともなかつた。敬虔なクリスチャンと言われると恥ずかしい)と述懐している。

胸の湿布替へるひまも聴く野分 (昭15)

「寒雷」創刊号の巻頭作品で、俳人飛旅子の晴れやかな出発であつた。

全速航帽の頸紐梅雨したたる (昭16)

開戦の眼に沁むばかり冬菜の霜 (〃)

海軍短期現役で中尉として、横須賀工廠造兵部勤務となる。

太平洋戦争中は、天皇制の国体にそぐわないキリスト教は敵性宗教として軍部から圧迫された。「ヤン」と言われ、「非国民」と言われて、石を投げられるほど大変なことがあつた。速藤周作曰く、「戦中は二重生活者にならざるを

得なかつた。まわりに胸をはって信者であるとは言いがら
かつた。しかし戦後すぐ解放されたかというときにあらず
だつた」。

梨剥くと皮垂れ届く妻の膝

(昭17)

この年予備役となり、電池製作所に復帰する。前年に信
子と結婚をしている。

雲の峯藍ふかくなる夕かな

(昭18)

歩みそめし子を陽炎の中におろす

(昭19)

とても戦中とは思えない平穩な句である。

茄子の花詩は真実にかへりけり

(昭20)

詩は真実を書かなければならないという、終戦時の切実
な感慨だろう。戦中、終戦時の飛旅子俳句は、あくまでも
やさしく、抒情的、そして寡作である。

この頃の作品世界を、後年、鈴木六林男氏に衝かれてい
る。「田川飛旅子は、クリスチャン俳人として、人間探求
派としてどのように戦争を通過し、この地獄の季節の終り
を見届けたか。原爆がおとされ、日本が敗れた年に、句集
に残した全作品が十一句とはまことにおだやかというほか
はない。この批判は読者にまかせて……」。

この鋭い指摘に対して、飛旅子は何の反論もしていない
ものと思う。人と争うことを好まない性格ではあつたが、
反論できる事実も持っていなかつた。相手が戦争をライフ

ワークとしてゐる六林男氏であれば尚更である。酒の席の
何かの話の折に、技術将校として、予備役として過した戦
中にいささかの罪悪感を持っているという意味のことを漏
らしたことがある。

戦後日本は平和国家発進に當つて、自由民主々義下の思
想行動の自由が保証された。ここでキリスト教徒は大手を
振れたかというときにあらずだったのである。

夜の雪に駅の時計の機械透け

(昭21)

露の葉むしくひ資本攻勢はじまるか

(昭22)

冬の鼠にうしろ通られ露語習ふ

(〃)

電池製作所の労組委員となり、文化部を担当した。その
折、古沢太穂氏をロシア語講師として招き、会社の食堂を
教室にして勉強を始めている。飛旅子は、この頃から「現
代俳句に社会性を」と主張して、混迷の戦後社会を意欲的
に詠んでいる。

太穂氏はマルキストとして、野心的社会性俳句を作つて
いた。

ロシア映画みて来て冬の人参太し

太穂

白髪みごとしかし俺には神を説くな

〃

当時同じ寒雷人として最も親しく付き合っていた太穂氏
に、「神を説くな」と声高に詠まれては信仰句など出来る
筈もなかつた。

東風が曲ぐる働く人の帽の縁

(昭23)

泉へ垂らし足裏を暗く映らしむ

(昭25)

郵便夫枯野に黒く荷を確かむ

(昭28)

戦後はマルキシズムの思想とその運動の飛躍期であり、羽仁五郎などの進歩的学者や知識人、社会運動家は将来革命が成ると勢いづいた時代である。マルキシズムの唯物論では、心や神や宗教は唾棄された。宗教は、社会批判と変革の眼を曇らせる「阿片」だと言われたのである。その戦後すぐの学校教育を受けた私の経験で言うなら、宗教は何れなくなるものだがぐらいに考えていた。

昭和二十四年の「風」でのあるアンケートに飛旅子は、
「戦争を批判する力を持たなかった当時の自分を恥ずかしく思う。青春時代は勉強ばかりで、マルキシズムのマの字も知らなかった」と申し訳けなさそうに答えている。

だが、エリートであった飛旅子は、昭和二十六年には会社側に立つ役職につくことになり、労働組合を離れた。そして、技術提携先の米国グールド社へ四ヶ月の出張となる。

降誕祭雪靴脱げばうなだれぬ

(昭26)

コスモス見る尼僧の帽の白庇

(昭27)

髯の神父眩き登る基地の坂

(昭29)

クリスマス前夜睡魔と闘いをり

(昭30)

十五年間のキリスト教的作品は数句である。どれも囁目

吟で、信徒としての心は詠んでいない。戦中には白眼視され、戦後の進歩的といわれた左翼的傾向の社会にあつては、余程強靱な信仰心を持っていなければ作品化できなかったろうと思う。

キリスト教回心と告白

昭和三十一年三月二十四日の日録に、飛旅子は「或るキリスト教回心を経験す」と記している。

回心とはラテン語で変化の意。過去の罪の意志や生活を悔い改めて、神の正しい信仰へ心を向けることである。この体験は、通常は長い霊的変遷の到達としてあるが、唐突に訪れることもあるという。仏教でいうなら発心か。ローマ時代、キリスト教を最も迫害していたユダヤ教徒のパウロは回心して、最も熱心なキリスト教の伝導者になったという。

余談だが、アメリカのブッシュ大統領も四十歳の時、著名なテレビ伝導者ビリー・グラハム師の導きで回心をして、生まれ変わり、アルコール依存症を克服したという。

日本的に言うなら大厄でもあった四十二歳の飛旅子は、何がきっかけで回心を体験したのか。

生と死の境に洩らす咳一つ

(昭30)

寒竹鳴つて父は言葉を探しをり

(昭30)

昭和二十九年の大晦日に、六十六歳だった父上が脳溢血にて倒れる。以来失語症の残った父を何十句にも詠んでいるが、心を痛めつづけていたことがよく分る。

またその暮には、横浜工場次長兼研究課長兼技術課長に任命され公私共に大変だった。

田川博氏の蓄尿管へ寒く尿る

(昭31)

冬の朝日看護婦は帽に髪押し込む

(〃)

一月、今度は飛旅子自身が急性腎炎にて慶応病院に入院する羽目となったのである。高血圧症もみつきり、三ヶ月の入院生活となる。

回心の体験は、入院生活を終えた直後のことであつた。それ迄祈ることもせず、信徒としての行いも怠けていたことを反省して「キリストによる救いをひたすら願う」と記す。ここから一気に信仰の作品が現われてくる。

麦の穂を壺に挿し読むマルコ伝

(昭31)

キリストは自らの死を地に落ちた麦にたとえたが、麦の穂はパンであり、キリストの体を象徴するものである。その青麦を活けて、福音書の「マルコ伝」を開いている。「マルコ伝」は、新約聖書の中で最もキリストの生々しい人間の息吹を伝えているという。

母の日や教会の木の椅子に傷

(昭31)

母の日は日本ではポピュラーになっているが、そもそもはアメリカのメソジスト教会から始まったものである。

(信仰の必要を痛感し、聖書を読む)と書き記し、妹の竹谷信子のすすめによつて、日本キリスト教団東中野教会へ通うようになる。教会の行事にも積極的に参加をする。

祈るとき木の教会を梅雨つつむ

(昭31)

回心の祈りというのは、キリスト教徒として自分が罪人であることを認識することでもあるという。

樹を白く塗装せり商クリスマス

(昭31)

信仰などどこ吹く風の日本人のバカ騒ぎを「商」の一字でチクリと刺している。まさに高度成長期に入らんとする頃である。

神の話を聞きし足にて氷滑る

(昭32)

第二句集「外套」の小題に、「木の教会」「神の話」「ネロの鞭」「使徒行法」などを付けて、はつきりとキリスト教徒であることを告白している。

神の存在と科学的理性

木の実降る遠くで甘く死が呼ぶ日

(昭32)

紅梅の幹に通ふは神の血か

(〃)

鼻強くかむ見えざるものに執着し

(昭33)

「鼻強く」は自解に俟たなければならぬ。(見えざるものとは、科学を超えたものであり、「神は在し給うか」の問題でもある。それへの執着で参ってしまうことがある)と、科学者としての葛藤を明かしている。「見えざるもの」は、終生のテーマとなる。

死の誘惑を感じながら、神と対話し、神を受け入れようと毎日曜日教会に通う回心の生活に入ったが、そこに大きな落し穴が待ちうけていた。

初蝶を見し眼つぶつて神見えず

(昭34)

〈昭和八年に受洗したが、信仰の道はけわしく、到底良き信徒とはいえない。初蝶は見えるが、神様は一向に見えてこないで、時々その姿を見失う〉と嘆く。

後年、「陸」への投句者の選評の中でも、しばしばこの問題に言及している。昭和五十一年の一例は次の如くである。

浴衣着て神を信ずと記しけり

飯塚千代子

冬灯し神失ひて涙出づ

既に洗礼を受けた信者にとっても、「神を信ず」と断言し得ない躓きの時がある。そして何かのはずみに、神を見失って失望の底に陥ることがある。だから、人は神がどうしても無くしてはならぬように、常に自分の身を逆境におき、いつも自分を磨いでいなければならない。

それではキリスト教にとつての神とはどのようなように定義されているのか。聖書の解説などを読んでも、当然だが私には雲をつかむようである。曰く「創生記は、存在するすべてのものの創造者として神を描いており、宇宙と時を支配する」。曰く「神についての一切の定義はほとんど不可能に近い。神は無辺にして、無限なるものであり、巨大なものである。神が何であるかを証明することは人知の及ばぬところである」。曰く「イエス・キリストの啓示したものが神の言である」。

夾竹桃羅馬に残るネロの鞭

(昭34)

欧米視察旅行の折のローマでの作。(夾竹桃の血のような花と遺跡の中に、ネロの使った暴虐なムチがどこかに残されていると確信した)と自解。皇帝ネロは、六四年のローマの大火に乗じて、キリスト教徒をスケープゴートに仕立てて迫害を開始したのであった。

菊へまぢかに耳向けて読むパスカル伝

(昭33)

パスカルが飛旅子にとつて、終生の大切な思想家であったことをこの度発見した。十代でもう三木清著の「パスカルにおける人間の研究」を読んでおり、七十八歳では「パンセ通読しつつ聖夜へ日の詰まる」を詠んでいる。「パンセ」は、パスカルの著したキリスト教護教論の冥想録である。

パスカルは十七世紀のフランスの数学者・物理学者・哲学者で、「パスカルの法則」や「考える葦」は誰でも知っているが、キリスト教に対して独自の宗教論を打ち立てた人物でもあるのだ。自らの信仰と理性との間の思想を確立した。「心の理性ではまるで理解できない独自の理性をもっている」と断言して、キリスト教のうちに理性を超越するものを保とうとした最初の人である。「信仰というものは、心で神を感じるものであり、理性によってではない」というもの。

まさにこれは、科学者としての理性によって神を見失いがちな飛旅子にとって、心強いバイブルであった。

神ありと決めし眼で読む冬の星 (昭37)

古代では星を神と想って眺めていたが、聖書では、星は神の被造物であり、神の大きさを証明するものとなつていく。

飛旅子は「神は在すのだ」と自分に言いきかせて、聖書を読んでいる。だが、まだまだ疑問はとけず、迷いの中にあつた。

安岡章太郎曰く。

受洗に当って、遠藤周作に電話して「おれは神というもののが分らないのだが、それでも信者になつてもいいのかね」と聞くと、「ある時、パッとページを開いたよう

にイエス・キリストに出会うというものではない」といわれた。

草田男も、クリスチャンの夫人にひかれて教会に行つたが、神を受けいれる心、拒否する心の間にゆれて、受洗は死の前日であつた。

飯の世に負う諸々

実梅仰ぎて心で犯す罪かぞふ (昭31)

罪のごとく瘤負つて駱駝緑蔭に (昭33)

罪一つ増えし春暁雨に覚め (昭39)

キリスト教徒にとつての罪とは、神と対立関係にあることだという。刑罰概念、即ち法律を犯したり、社会道徳に違反したりすることは区別される。神や隣人に対して愛を持たず、聖書から離れた生き方をするのである。聖書では、他のすべての罪の原因となる罪を「七つの大罪」として、高慢、色欲、貪欲、嫉妬、貪食、怒り、怠惰をあげている。

飛旅子は晩年まで、強い罪意識をもち、己を戒めるようにくり返し詠んでいる。

受難遇わが罪のまた山積す (平4)

時計草垣に咲かせて惰眠せる (平6)

八十歳近くなつての作。「受難」は「パッション」。時計草はパッションフラワーと呼ばれるが、同属のパッション・フルーツの雄蕊と雌蕊が十字架の形をしていて、キリストの受難をイメージさせるのだという。かつて飛旅子の家の垣根に植えられていた。

謙虚で穏和で質素な生き方を貫いていた師を目の当りにしていた俗人の私などには、どうしてそこ迄己を責めなければならぬのか合点がゆかなかつた。

罪のごとホースで縛し糞尿車

(昭38)

キリスト教には、核心となる難解な「原罪」がある。禁断のリンゴを食べて、最初の罪を犯したアダムとイブの子孫として、人間は生まれながらに原罪を負うものと考えられている。「罪のごと」が原罪を詠んでいると迄は言わな

いが、「糞尿車」に人間の業のようなものを感じる。分りやすく言うなら、死の恐怖におびえたり、不安に苦しんだり、人間的な限界におつかるその完全でないことが原罪なのだという。

短夜や愛といふ字を百度書く

(昭41)

キリストといふ語を吃り祈る秋

(〃)

キリストは、「自分を愛するように汝の隣人を愛せよ」の言葉が好きだったという。その「愛」の字を百度書いて

のである」というのが信仰の核心らしいと、私にもいくらか分つてくる。

遠藤周作の「沈黙」、三浦綾子の「氷点」などは、不条理の罪、原罪を主題にしている。

傷つきし柚子ほど強く匂ふなり

(昭27)

「傷」を語らずして、飛旅子の作品は語れないと言つてもいいだろう。

傷心は母の遺伝か杜若

(昭35)

自身を(母親に叱られると、すぐに「ごめんなさい」と先に詫びてしまう気弱な子だった。この性格を実は大いに嫌っている)と分析しているが、気弱ということは優しい心根の持ち主ということでもある。実は十二使徒の筆頭であるペテロも気の弱い人であつたという。彼はネロに迫害されて殉教している。

この傷つきやすい心が、陰に陽に飛旅子作品をおおっている。

ピーマンの青き拳や核戦争

(昭36)

飛旅子について師の楸邨は、ことある度に「私の姿勢を正してくれた人」「納得しないと決して妥協しない芯の通つた一人物」と語っている。また作品については、「自己に対しても、外に対しても、自分の信じられないものは感動しきれないという誠実さがある」と評して、弟子を敬愛

していた。

茶の花や医やすといふ語傷のため

(昭35)

この年の「寒雷」に、「心に傷のない人は」を執筆。(この厳しい世の中に生まれて、一日として心が傷つけられない日はない。俳句が生爪跡である為には、心の傷の嘆きがかもつていなければならない。時に、皮膚が破れて血が噴きだすような処がなければ……)と。

ガラス負ひ寒波の天を映しゆく

(昭38)

外套も疲れ釘穴つら瞑らず

(昭39)

この時期電池にトラブルがあり、会社は一時苦境に立たされ、飛旅子の心痛も大きかった。高度成長期の責任ある企業人として、苛烈な日々があり、傷つくことも多かったろうことは容易に想像できる。

犬交る街へ向けたり眼の模型

(昭38)

兜太氏に「現代都市の気味悪い面を曝してみせている」と激賞され、代表句となつている。いま一度この句の背景を考えてみると、盛んなる経済経済のかわいた社会が透ける。

花野にて獣のごとく傷つく日

(昭41)

袋蜜柑と暗礁われも傷隠す

(昭42)

まどろめば痛みも眠るクリスマス

(昭45)

痛みあるゆゑにわれあり星月夜

(昭49)

枚挙にいとまがない程に、傷や痛みや挫折を詠んでいる。

パスカルの言葉「わたし共の生は、本質的に惨めなものである」にいたく共感し、わが意を得たように、自分はベシミストだと明かしている。この頃総合誌の「俳句時評」などに、日本が工業社会へ転換して、科学技術の発達による人間疎外の時代になったことを憂う文を書いている。

こわれた心に一本の燭クリスマス

(昭43)

聖書では、「ある目的のために屈辱や挫折があるだろうが、それはただの不条理とは考えず、イエスに従つているのだと思いなさい」と説いている。

一花ごと自分を大切にと董押す

昭和三十九年発行の第二句集「外套」の「あとがき」に、
「二十五年近く日々の哀歎をつづる句を作つてきて、俳句とは自分自身を大切にすることだという私なりの小さい開眼をした」と記す。

父死せり寒く大きな鼻を残し

(昭40)

飛旅子五十一歳の時、父上が他界。文学を反対され、「爪をかむ癖を直すことだけしか父を超えられなかった」と自嘲気味に述懐しつつ敬愛していた父上であった。その後の悲嘆追慕の数多の句をみると、飛旅子にとってはキリストの死にも匹敵するものだったのかも知れない。

弱きときもつとも強し董買ふ

(昭41)

堯は飛旅子の最も愛した花で、句も多い。

聖書のパウロの言葉に「わたしはキリストのためならば、弱さと侮辱、危機と迫害、行き詰りに甘んじよう。なぜなら、わたしが弱い時こそ、わたしは強いからである」がある。

桐咲くやあつと云ふ間の晩年なり

(昭41)

兜太氏の「愛句百句」にとられているが、ベシミストの飛旅子らしくまだ五十歳過ぎたばかりの作である。「青春が戦中戦後の混乱期にあつたから」と自解してはいるが、

黄落期みんなが合つた時計持ち

(昭42)

人間が同じ時間を所有することの不思議を思つて作つたというが、神の創造した時間の神秘性を詠んでいるのである。

寒夜の尿感謝感謝と走り出づ

(昭44)

これも造物主への感謝である。

許されてあると思はず泥鰌煮る

(昭46)

古びたる聖書あり年改まる

(昭47)

飛旅子はいつも「田川の大カバン」と呼ばれた黒い靴を持ち歩いてきた。その中には、耳栓などの七つ道具、何冊かの本と聖書が入っていた。周囲がハラハラするような晩年まで提げていたが、私は何かの責めを負わんとしている姿にみえて仕方がなかった。

天皇も老斑持たす桜かな

(昭48)

八月に、主宰誌「陸」を創刊。「天皇も」は創刊号に発表したものだが、自身も還暦を迎えて、昭和天皇の老斑に感慨ひとしおのものがあつたことだろう。

「陸」の誌名は、旧約聖書の創生記にある「神はそのかわいた地を陸と名づけ、水の集まつた所を海と名づけられた」から取られた。

わが名に潜む十字架三つ落葉せわし

(昭48)

本名の博の字の中に十字架が三つあるという。この句意はどう読むべきか。イエスの教えは実にラジカルで、「自分の十字架を負え」というのだが、自分は受難の十字架を三つも負っているというのか。または、イエスの十字架は贖罪への感謝のしるしとして、「愛の極致」とも言われているので、その愛が三つもわが名に潜んでいると言いたかったのか。ベシミストなら前者だろう。

大綿や専務室はや他人の住

(昭49)

古河電池(株)の専務取締役を退き、非常勤の顧問となる。

春暁を覚めんとすなり飯の世に

(昭50)

自註(ヘクリスチャンである私は来世を信じているから、この地上を飯の世と思つている。目覚めようとして、一日の生をまた与えられて有難うございますと神に感謝する。

この一日が飯の世だと自分に言い置きかす何物かが、私の中に古くからある。

タナトスとエロス

殺象もする死真似や笑ひけり

(昭32)

炎天を来て死に近き友を怖る

(昭32)

金魚売の日焼奥眼に死の灰降る

(昭36)

割合早くから死や葬や墓を詠んできている。

死ぬ時は友も要らざり麻を着る

(昭45)

覚悟の中に冬の朝の死も入れる

(〃)

この年を境にして、それ迄の死の作品とは様相を異にしている。自分のこととして切迫した詠み方で、数も俄然多くなってくる。

祝辞みな未来のことや植樹祭

昭和四十五年発行の第三句集「植樹祭」の「あとがき」では、(楸邨先生からの「俳句は生きた証」を後生大事に

して歩いてきたが、もう停年期である。未来の尊さは今にしていよいよ切実である)といくらかの焦燥感を述べている。

今死ぬも良しと言へるか寒に入る

(昭46)

夜光虫まだ見ぬ黄泉の端めくも

(昭47)

耳栓をして死すことあらむ濃霜降る

(昭48)

デパートの火事や墜ちゆく人撮らる

(〃)

神の問題に深く入ってゆけば、人間として避けることのできない死の問題に突き当たるといことだろう。

卓に這ふ浮塵子見て酌む厭世家

(昭47)

ペシミストの飛旅子にとつて、酒の効用は大きかった。晩年には禁酒を試みたりしましたが、私のご一緒した経験では、アルコールが出てくると師の表情のほぐれてくるのがよく分かった。盗み酒、隠し酒の作品もある。

鳥雲に命終のことおそろしき

(昭49)

余りにも直接的表現であるが、これ程正直な詠み方もないだろう。死は人生にとつて最大の恐れである。

釈迦もキリストもマホメットも、死への不安や恐れを克服するために、迷い思索し難業苦業をしたのであった。まぬがれ得ない死の問題に対して、勝利を与えてくれるのが宗教であると信ずるからこそ、信仰者は敬虔をめざすのだと思う。

飛旅子はすでに「夏羽織つけて信仰固くあり」と詠んでいたが、この局面にきて、突然強い死への恐怖におそれたのである。

死ぬまでは生ひよどりが家かこむ

(昭49)

春宵を独りにされぬ死後のごとし

(昭50)

靴のみは無傷炎天下の轢死

(昭51)

まるで「死」の文字が座右にあつた如くに作句している。聖書では、原罪を犯した結果、人類に死が入り込んだとして、「罪の支払う報酬は死である」と説いている。

このタナトスにとりつかれたような時期、「黒」にも執着している。

悪しき日のために黒穂をつみて挿す

(昭47)

秋の田をくる黒傘のキリストは

(昭48)

黄金色の田の中の道を黒傘の人がやってくる。遙かより自分に近づきつつあるのは、復活のキリストに違いないと立ちつくしたのではないか。聖書では、死の問題の解決はキリストによつてもたらされる、としている。

黒い布団といふものあらばそれに寝む

(昭49)

聖盞はきつと黒色クリスマス

(〃)

黒き泡眼の中を飛ぶ実朝忌

(昭50)

終末や風船に付く黒い糸

(昭51)

「終末」には、復活からの「更新」という意味があると
いう。

飛旅子は、命終への震える魂を黒色によつて鎮めたかつたと解釈すべきだろう。黒は忌むべき色ではないと考える私のことでは、黒い衣服を身にまとうならひどく安心してられる。黒は死の不安を暗ましてくれる色であつた

筈だ。

夕焼は天の帝王切開か

(昭51)

地上では旅人なりと冬の灯消す

(〃)

クリスチャンであつた母上が他界する。

岸に黒く待てり流燈を突く係

(昭51)

人形を射つ流燈の町の辻

(〃)

城佑三氏の案内で嵐山を訪れた折の作。「岸に黒く」の句には、この世の終る地点から始まる冥界を詠みながら、シヨウ化された現代の仏事を風刺している。これが飛旅子の眼だ。

「人形を射つ」は、へいま流燈をみてきたばかりの人が、射的場で人形を射つて歓声を上げている。人間とは悲しい存在だ」と自解。

廻路ゆくひとりりひとりの暗渠持ち

(昭51)

同じ信仰者として、いつの頃からか仏教にも深い関心をよせている。

熱力学より茂吉が楽し桜の夜

(昭51)

東京理科大で非常勤講師として「熱力学」の講座を持っていたが、やはりどうしても文学の方が楽しいと詠んでしまふ。

水澄むや退職の荷に聖書あり

(昭52)

顧問としての席があつたが、それも解かれて名実共のり

タイアとなった。会社の机にも聖書は入れられていた。

第四句集「邯鄲」の「あとがき」に、〈定年を迎え、一生の間一筋に勤めた技術者としての仕事からも離れた。私の一生は何だったのかと顧みるとき、盧生の「邯鄲の夢枕」はまた私自身の嘆きでもある〉と記す。

尿を出すことも骨折り花に老ゆ

(昭53)

一見弱虫そうにみえる作品群だが、その弱さや老や死から逃げず、真正面から詠む飛旅子にこそ人間の強さがあるのだ、と気付く。

ことごとくデモン去りたる冬の肋

(昭52)

キリスト教では、デーモンとはサタン(魔王)に率いられる悪霊のこと。悪の根源であるデーモンは、人間の体にとりついたりもするという。

「灼石の一つ憤怒の目鼻みゆ」「市中にはらわたを煮る露の日々」とも詠んだ苛烈な企業人の勤めが終つて、肋に巢喰つていた諸々のデーモンが退却したというのである。

楸邨には、戦争責任を追及された頃の作品に「サタン生る汗の片目をつむるとき」がある。余計なことだが、久女にも俳句継統と離婚問題に悩んでいた頃の句に、「われにつきみしサタン離れぬ曼珠沙華」がある。

このタナトスにこだわった数年のあいだに老と死の作品は百三十、黒は三十句程ある。

神のおとずれの時を知らずに鳥威す (昭52)

隙間風般若波羅蜜多生きたしや (〃)

鳥交る此処千歳村粕谷なり (〃)

老人に観念の海曼珠沙華 (昭53)

愚物がおちたような「生きたしや」「千歳村」の句である。そして「観念の海」の果てに平安の訪れを予感させる。

「日々死すべし」と口ずさみ種選ぶ (昭53)

松蟬や葉書・破瓜・墓・馬鹿・破壊 (〃)

六十四歳の折のこの作品には、微妙な句意がかくされているのだ。「破瓜」は処女膜の破れることだが、男性の六十四歳のことでもあると「広辞苑」に出ている。その次に「墓」「破壊」がくる。単純な語呂合せではない。

フロイトは言う。「人は生得的にエロス(生の本能)と対立して、タナトス(死・破壊)への本能(衝動)をもつ」と。言い換えるなら、タナトスに襲われた時、人は「生きたし」とエロスへ揺戻すのではないだろうか。鬱然として、飛旅子にエロスの作品が生まれる。

暴れる蝶猫が脚へて陶酔す (昭54)

Tシャツの虹は二つの丘を越ゆ (〃)

人形をみな裸にす暖炉の前 (昭55)

おんわれめありと思へぬ女難かな (〃)

「おんわれめ」は六十五歳の作。兜太氏が、「このエロ

スの句は田川さんの句として透逸だ。こういう句を作るようになったのは、楸邨先生の影響であり、田川さんの成熟だ」と語っている。いみじくも楸邨六十五歳の時、「のんのと馬が魔羅振る霧の中」を詠んでいる。師弟一如というべきか。

激写時代この大汗は胸か尻か

(昭55)

塾始め母音はいんと読めば子等笑ふ

(〃)

鬼灯や方寸になほエロスあり

(昭56)

これ以降、深刻な死の句は消失する。

山法師咲けば濃くなる旅の鬚

昭和五十五年刊の第五句集「山法師」の「あとがき」で、

この頃の心境を述べている。

〈この句集名は、昔出家通世し奥深い山にこもって世俗に反抗した僧侶のイメージに憧れたからである。他の何人のためでもなく、自分のみのために作ってきた俳句は、人の評価はともかく、わずかに私の内に籠って荒ぶる魂を鎮める役割を果たしてくれた〉

通世したき夫と住みて栗を剥く

(昭56)

〈孤独ほど友としてふさわしい相手はいない〉と云い、

〈遁世というあこがれの境位を体得してからあの世にゆきたい〉と。

科学と訣別して

物を焚き熱を逃がして飾売る

(昭58)

一般的には写生の対象となりにくい熱という物理的物体に目を向けて、科学者の面目躍如というところだ。〈見えぬもので、人間にとつて大事なものが、段々身辺に多くなつてくる〉と、この頃しきりに述べてもいる。

見えぬもの袴と刺す秋晴は

(昭58)

キリストを着よと手編のジャケツ賜ぶ

(〃)

「キリストを着る」とは、アガペー（イエスの無償の愛）に浴するということだろう。

神ありやあり雁来紅の立つかぎり

(昭58)

雁来紅の見事な色彩を見せてくれるのは、造物主の神様以外にある筈がない、自分もその造物主の御手に守られていると信じて、一句をなしたという。

非常口に緑の男いつも逃げ

(昭58)

有季か無季かで物議をかました作品だが、飛旅子晩年の代表作となる。最近私は、この「緑の男」に飛旅子一流の自嘲を秘めているのかも知れないと思うようになった。

鶏頭に励まされをり見えぬもの

(昭59)

復活祭神は見えざるもの最

(昭60)

科学者の飛旅子にとって、「見えざるもの」とは音や電波や光や熱などであったが、ここにきてその最たるものは神であると確認する。

山靴に赤紐交差涅槃西風

(昭60)

「正法眼蔵」読めど進まず妻は穂に

(ク)

クリスチャンが何故と思うが、遠藤周作なども仏教書を沢山読んだという。ヨーロッパの宗教を受け入れてゆくには、やはり困難も多く、仏教やアニミズムなども知りたいという欲求が強まるようだ。

飛旅子は、信仰の機微に触れたいと、青年時代から道元の書を座右に置いていた。だが難しさに敗退しつつ、最晩年まで挑戦した。

百合を粧ひしものが星座を司どる

(昭61)

この年の「陸」に、「見えるものから見えぬものへ」と題して、科学への訣別文とも言えるものを書いている。

私は科学を学びながら、絵画や短歌俳句の芸術の分野に興味が拡がってゆくにつれて、段々と科学が規定しうる分野には一つの限界があることに気がつきだした。科学の力を評価はするが、自分の老病死がさしさまつっている現在、科学万能主義にはついてゆけない。そこから先にあるのが、宗教とか信仰というものだろう。科学から宗教への段階には大きな落差がある。どこか高处から思

い切つて飛び下りるような論理を超えた飛躍をしないと、この段差を克服できない。

威し銃修道院の裏田にも

(平2)

顕微鏡で覗く聖書に生えし徴

(平7)

科学と宗教の問題は、古くて新しい問題といえる。かつてキリスト教は科学に対して不寛容であった。ガリレオ・ガリレイの宗教裁判でも分るように、弾圧をした歴史がある。現代では勿論弾圧はないが、信仰者の胸中には科学との越えられない深い溝があるのだろう。夏目漱石は、「人間の不安は科学の発展から来る」と「行人」の中で語らせている。科学がどんなに発達してもカオスの領域は残されるということだ。若い優秀な科学者がオウムに入信したことも、この問題と大いに関係する。

盲導天使徒の眼持てりクリスマス

(平3)

飛旅子は、盲導犬に出会った時、ふと使徒（キリストの福音を伝えるための弟子）が街を歩いているのだと自覚したという。

最後の第七句集「使徒の眼」の「あとがき」に、(俳句が私をどんなに力づけ生き甲斐を与えてくれたか分からない。五十数年にわたって御指導いただいた恩師加藤楸邨先生に心からの感謝を捧げたい)と記しているが、その出版の月に楸邨が他界する。

平成五年七月の楸邨の死は、飛旅子にとってどれほどの痛恨事であったか。いつの頃からか、「楸邨先生は神様」と漏らす程に畏敬する師であった。

達谷山房の大菩提樹に再会す

(平6)

達谷山房は楸邨居だが、この菩提樹は恐らく楸邨の氣に入りの樹であつたのだらう。昔田川夫人が訪ねた折、「是非信子さんに見せたい樹があるから」とわざわざ庭に案内されたという話を聞いている。ことに飛旅子にとっては若い頃から何度も眺めてきた菩提樹である。私の知る限りでだが、これが唯一の追悼句だ。

喜雨到る基督者われ喜びて

(平6)

飛旅子俳句の中で、これほど手放して喜ぶ作品は他に知らない。長い信仰生活の果ての八十歳になって、漸く「基督者われ」と高らかに詠んでいる。生を欺かずにきた信仰と句業の豊かな収穫である。

「創生記」机上にひらく初明り

(平7)

「福音歳時記」筆の鉢と身辺に

(平8)

悪霊のつきし萌しや短夜の生

(平8)

好きなものを身辺に置いて過す平穏な日々だが、時にふと、かつて悩まされた悪霊(デーモン)に憑かれそうな気がする夜もあった。(老いて弱者となり、金力欲、名譽欲がなくなると、見えなかったものが見えてきて、魂は自由

になる)は、最晩年の言葉である。

街路樹遙かに十字架立てり今の幸

(平9)

この年には氣力の衰えがすすみ、作句数も著しく少くなってくる。

大きな息胸に入れけり初日浴び

(平10)

新年の窓棹の影背に負ひたる

(平10)

二月に、第十回現代俳句協会大賞を受く。

竹売りの声句会の人を笑はせ過ぐ

(平10)

虹を生む蛇口の廻り人集め

(平10)

平成十年は、以上の四句のみである。残念ながら、それ以降の作句はない。創作の力は無くなりつつあつたが、句帳の最後のページには、赤ペンで「作句修練」としつかり記されている。

平成十年七月に「陸」二十五周年を祝い、九月には、唯一の句碑が山形県尾花沢市に立てられた。

おわりに

平成十一年三月八日、心筋梗塞と脳梗塞によって倒れ、緊急入院をする。意識は戻ることなく、四月二十五日肺炎を併発して他界。享年八十五歳であつた。

告別式は四月二十八日、日本キリスト教団東中野教会で

行われた。飛旅子は、自分の告別の讚美歌は「よろずをしらす愛の御手に」にしてほしいと書き遺していた。「センチメンタルに歌わないで」とも付け加えられていたという。この讚美歌の四番の最後のフレーズは、「悩みし子らは幸なるかな」である。それはまさに、きびしく内省しつづけた飛旅子にこそふさわしい歌詞である。

師飛旅子の苦渋の作品群は、一種のスタイルであり、文学的耽美主義ではないかと思っていた。しかし、今、それは神と己との距離を計る一つの物差しとして日々詠まれていたのだ、と確信している。晩年は、他者の眼に叶う作句には関心がなかったのである。

基督者田川飛旅子は、七つの大罪すべてを踏まえて、それを超克するために信仰を深め、その証しを率直に作品化し、自己救済を果して旅立ったのである。

〈現代俳句〉二月号より転載

